特集

「雪の産業化」による持続可能なまちづくり

【問合せ】U&Iときめき課　☎773・6659

北緯37度の奇跡

私たちが住む南魚沼市は、北緯37度（ギリシャ・アテネ市、アメリカ合衆国・サンフランシスコ市などと同緯度で、比較的温暖な都市が多い）に位置し、人が住む地域としては世界有数の豪雪地です。雪冷熱研究の第一人者である長岡技術科学大学・上村教授によると、「豊富な資源が天から降ってくる『北緯37度の奇跡』ともいうべき地域」だということです。しかし、実際に生活している私たちにとって、冬季間の雪下ろしなどの除雪作業はとてもつらく、車の運転にも支障をきたす生活の邪魔者という認識の方が多いと思います。

歴史的に見ても、昭和の前半までは冬季の生活を営むうえで多すぎる雪をどのようにして克服するかという「**克雪**」が雪国の最大のテーマとなっていました。除雪機や消雪パイプなどが普及した昭和の後半からは、雪を娯楽的に活用できないかという視点からウインタースポーツの普及など、雪を生活のなかで利用していくという「**利雪**」がテーマとなりました。さらに、平成の時代になると雪をポジティブに捉え、地域の産業にどのように活用するかという「**親雪**」の発想が生まれてきました。

「克雪」から「利雪」へ、そして「親雪」へと雪に対する発想が転換しました。

雪の産業化

この「**親雪**」の発想から生まれて今一番注目されているのが、江戸時代から続く雪国の知恵「雪室（ゆきむろ）」を応用した雪室貯蔵・雪冷房技術です。実は、新潟県中越・上越地域には日本で最も多くの雪室が集積して